

外国語だより

Vol. 8

VOICES FROM THE FOREIGN LANGUAGES SECTION, INSTITUTE FOR LIBERAL ARTS, Vol. 8

目次

海外活動報告

GELS ワークショップと LSPHE 国際学会参加報告

(於：スウェーデン王立工科大学)

木内 久美子 3

オールド上海への扉 ～上海図書館訪問記～

楊 冠穹 7

イベント報告

〈東京工業大学オープンキャンパス 2023〉

「大学から始めよう——東工大の第二外国語」

安徳 万貴子 9

〈東工大の研究者展〉

2023 年度「東工大の研究者展」への登壇

小泉 勇人 10

活動報告

2023 年度の東工大ライティングセンター

小泉 勇人 12

研究室から〈新任の挨拶〉

言葉を可視化する

広本 優佳 14

紅葉の季節に書いて

楊 冠穹 15



Main Bldg. photographed by Masatoshi Tamura

GELS ワークショップと LSPHE 国際学会参加報告 (於：スウェーデン王立工科大学)

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

准教授 木内 久美子

英語学習における AI ツールの存在が教育の前提と見なされるようになりつつある昨今、英語教育のみならず外国語教育全般において、さまざまなツールの活用の可能性、教育効果、教育現場への影響とともに、その限界をめぐる議論も活発に行われている。学生が個々の学習においてインターネットのリソースや AI ツールを用いることが少しずつ常態化するなかで、学生の学習の進捗や課題を評価する新たな枠組みの策定が求められている。本学でも授業における AI ツールの扱いについて、詳細な検討が進められている。ⁱ⁾ さらに AI 社会においては、生成 AI の精度やその言語間格差が問題となっており、精度が突出して高い英語を、ユーザーが高い言語能力とリテラシーをもって運用する技能が求められるようになっていきます。外国語教育の現場では、生成 AI との協働を前提とした教育の可能性を探るとともに、生成 AI には扱えない言語教育の側面の明確化が求められている。この課題は外国語教育だけのものではない。あらゆる教育においてインプットの面では一定程度生成 AI との協働が想定されるのであり、教育現場全体で熟議すべき問題である。

このような状況にあって、2023 年 6 月理工系学生の英語教育に特化した外国語教育の研究ネットワーク GELS (The Global Engineers Language Skills) からワークショップと関連学会にかんして本学にお声がけをいただき、日本語セクションと外国語セクション(英語)を窓口としてこのネットワークに加盟した。さらにはこの加盟と連動して、スウェーデン王立工科大学(KTH)にて開催された GELS のワークショップ(2023 年 9 月 6 日と 7 日)と LSPHE (Language for Specific Purposes in Higher Education) の国際学会(9 月 8 日)に参加する運びとなった。この度の外国語セクション(英語)の教員のワークショップおよび学会への参加は、リベラルアーツ研究教育院による助成により実現した。

1. 予備知識

学会の報告のまえに、GELS ネットワークと LSPHE について簡単に述べておきたい。ⁱⁱ⁾ GELS ネットワークとは、2015 年に創設されたヨーロッパの理工系大学における外国語教育のありかたを考える教員ネットワークで、ケンブリッジ大学の言語コミュニケーションセンター(Centre for Languages and Intercommunication)を起点として活動を展開してきた。

日本と同じようにヨーロッパの理工系大学のなかでも文系

教員は少数派で、外国語教育に関していえば、特に英語以外の第二外国語の場合、無期限雇用の常勤教員がないプログラムや、特任教員が一名で運営しているプログラムもある。このことは、外国語教員が外国語教育について相談する上司や同僚がいないことを意味する。

GELS ネットワークは教育現場での外国語教員の孤立に対処するため、大学をこえたネットワーク構築と情報交換や教員交流(「コラボレーション」)をすすめてきた。近年 EU では、ヨーロッパをこえた研究交流が奨励されており、外国語教育もこの潮流のなかにある。GELS には現在、日本からは本学も含めて三大学(東京大学と九州大学)が参加している。GELS の活動は LSPHE の学会と連動しており、学会は年に一度、GELS のワークショップは隔年で、学会と同時に開催されている。

LSPHE は、高等教育における特定の目的に特化した英語教育について研究する学会である。各専門分野にはそれぞれに特化した語彙や言い回し、またその分野で前提とされる知識やコミュニケーション文化があり、LSPHE ではこれらの特殊性を踏まえて、分野のコンテキストに特化して外国語教育を行う。たとえば理工系英語であれば、授業で扱うコンテキストは、テクノロジーや生命科学、環境などだ。もちろんここには国際的な科学コミュニケーションについての学習内容も含まれる。ESP の対概念として、EGP (English for General Purposes) がある。ⁱⁱⁱ⁾ こちらは一般的な英語技能の習得を目指す英語教授法の枠組みである。大学教育における学術的なコンテンツのインプットとアウトプットを念頭に置いた英語教育の枠組みとして、EAP (English for Academic Purposes) が知られているが、これは ESP (English for Specific Purposes) の一つと考えるとよいだろう。

2. 参加報告

2.1 GELS ワークショップ

2023 年 9 月 6 日の夕方には GELS ワークショップ前の交流イベントが開催された。ワークショップに参加するメンバーが KTH のキャンパスに集い、KTH の日本語教員、調垂紀子先生によるキャンパスツアーが行われた。このツアーや夕食会ではワークショップ前に多くの参加者と知り合うことができた。

9 月 7 日のワークショップのテーマは「コラボレーション」だった。午前中の前半に二つの講義セッションが設けられ、後半にはディスカッションが行われた。(写真 1)



写真1：会場となったKTH図書館の吹き抜け部分。もともとは図書館の中庭だったとのこと。

最初の講義セッションでは、ケンブリッジ大学の GELS の運営のコアメンバーである David Tual 氏と KTH の Jamie Rinder 氏が、GELS における「コラボレーション」の理念と実践を紹介した。

Tual 氏は理工系学生のための英語教育の創出のプロセスとして、まずは理工系に特徴的なコミュニケーションのあり方を研究し、そのうえで教材（教科書を使わないことと学生の自主的学習の創出が大前提として話が進められていた）や学習環境を整えることが重要だと述べていた。特に印象に残ったのは、「教員間のコラボレーション」と「集団的知性（Collective Intelligence）」の相関性である。素材（教材）やアイデアを一個人の所有物とするのではなく集団で共有することで、素材はさらに磨かれ、アイデアも洗練されていく。またここから教育研究プロジェクトも生まれる。さらに異なる社会的・文化的属性を持つ教員が、様々な種類のクラスを担当し、異なる学生や役割、また役割を経験することで、コラボレーションの場に多様性を育てることができるといったことだった。話し合いの場に参加する女性比率についても当然のこととして言及されていた。

Rinder 氏はスウェーデンの理工系大学における言語使用と多様性の問題について紹介していた。英語を共通語とした理工系の大学教育において、母語のスウェーデン語で論文を書けないと感じる学生が増えており、言語の多様性が損なわれかねない状況がある。事例として、現在、高等教育で行われているバイリンガル授業（授業内はすべて英語だが、レポートだけはスウェーデン語で書かせるなど）の実例が紹介されていた。

第二の講義セッションでは、ケンブリッジ大学の Tual 氏とフランスの理工系高等教育機関 CentraleSupélec の英語教員 Julie McDonald 氏が、両校共同で行なっているタンデム授業について紹介した。タンデムとは、各学生の学習したい言語と教えられる言語をマッチングし、二つの言語でコミュニケーションをとりながら外国語を学ぶ学習の仕組みを指す。両校ではこれが通年の授業として構築され、かつポートフォリオの活用によって機能していることが非常に興味深かった。詳細なカリキュラムの内容は、小冊子の

配布によって共有された。

午前中の後半では、5・6人の異なる国籍や母語をもつ教員同士がテーブルを囲み、配布された「指示書」（写真2）に従って、「コラボレーション」をめぐる1時間近いディスカッションを行った。

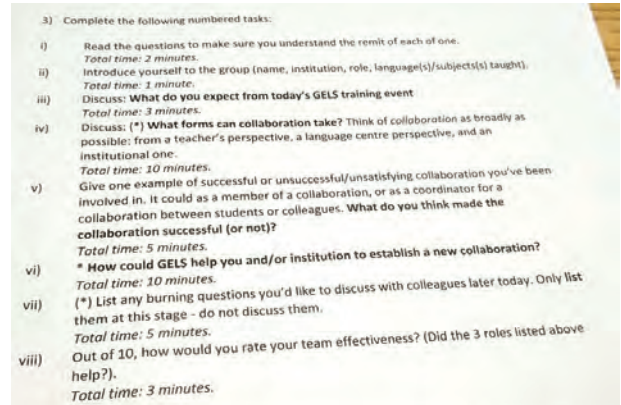


写真2：GELSワークショップで配布された指示書（部分）

ディスカッションでは、長年 GELS に加盟しているヨーロッパの教員から、日本の理工系大学との交流に興味があるとアプローチをいただいたり、GELS のホームページの有用な情報を共有していただいたり、大変参考になった。私は昼休みに KTH の人文環境学のラボが運営するセミナーに参加したあと、日本語教員の先生方に同行して KTH の日本語の授業を見学した。^{iv)} スtockホルムで日本語を学ぶ学生のバックグラウンドは多様で、シリアやパキスタンからの移民二世のスウェーデン人の学生や、中国からの留学生もいた。日本で英語を学ぶ学生に、日本語と英語によって開かれるこのような多様性との出会いを知らせたいと心から思った。

午後のプログラムについて聞いたところ、午前のディスカッションの成果が会場内にフィードバックされ、そのなかから午後のディスカッションテーマが複数選ばれ、有意義なディスカッションが行われたとのことだった。

2.2 LSPHE 学会：個別学習、振り返り、リアル

9月8日は全日学会だった。午前と午後それぞれに二つのセッションが並走しており、各セッションで二つの発表が行われた。そのためすべての発表はきけなかったが、ありがたいことに学会のサイトではほぼすべての発表のスライドが公開されており、自由に閲覧が可能である。^{v)} 特に印象に残った発表を振り返ってみると、「個別学習」「振り返り」「リアル」という三つのキーワードが浮かび上がってくる。

「個別学習」とは学生の学習のカスタマイズだ。一人で学べることは個々に自らのレベルとペースに合わせて、時間を見つけて学ぶという発想で、外国語教員の役割は授業設計と授業運営によるファシリテーションである。「自律的な言語学習促進のための反省型のポートフォリオを

ChatGPTに組み込む」(Tual and Bogdanovic)では、ChatPDFなどのAIツールを積極的に使用した個別学習型の授業が紹介されていた。学生は学習の主導権を与えられ、自分のレベルにあった教材や問題をAIツールで作成する。解答と答え合わせはすべて一人で取り組める。ポートフォリオをとおして、教員に活動を報告し、教員もフィードバックを返すというやり取りの中で、学生は自分に合った学びのスタイルを探ることができる。

またKTHの英語教員が独自作成した「理工系英語のライティングガイド」にも、ポートフォリオを活用した個別学習型の英語学習が前提として組み込まれていた。^{vi)}「不可能への挑戦」?: 科学技術英語の手引きをつくる」(Rinder, Bottomley, Zeitler Lyne)で紹介された内容のなかで、とりわけ素晴らしいと感じたのは、この詳細な手引きがたえず授業内で活用され、学生への度重なるアンケートによって、内容が更新され続けているということだった。このプロセスが可能なのは、英語学習のプロセスのなかで学生が「振り返り」を行なっているからである。さらに「対話と振り返りから批判的かつ倫理的なライティングツールの活用を促す」(Bottomley and Dimavičienė)では、学生が英語学習においてAIツールの活用を授業をとおして実践し、振り返りながらディスカッションを重ねるというユニークな授業が紹介されていた。学生は自分の外国語学習の進捗状況だけでなく、自分のAIツールの使い方、教材の使いやすさなど、多岐にわたり「振り返る」機会を与えられ、その成果が学生の学習だけでなく、教員の英語教育や教材開発にもフィードバックされている。

三つ目のキーワードは「リアル」である。教室内で同じ母語の学生同士が教科書に沿って外国語で会話を練習することと、タンデムで交換授業のパートナーと教え合うプロセスでは、明らかに後者の方が実際の外国語の言語使用のリアルに近い。リアルな設定は、学生の外国語学習のモチベーションを高める。東工大ではリアルに外国語を使う機会が少ないことが、学生に共通する悩みだ。外国語教育はいかにしてその機会を提供できるのか、また授業をとおして学習プロセスにリアリティを持ち込めるのかということが盛んに議論されていた。この流れで興味深かった発表が二つある。ひとつは「科学は難しい!」: 英語学習者向けの科学技術英語入門」(Schutz and Hansel)である。ここではイベント型の英語授業が紹介されていた。この授業の課題は、科学にかかわる知識をわかりやすく高校生に伝えるビデオを制作することである。授業のなかには、理工系の教員によるコンテンツについての倫理教育や内容についての助言(母語のフランス語で)や選考プロセスがあり、最終的に残った案が本格的なスタジオでの撮影を許される。本戦のコンテストに高校生が招かれ、聴衆の投票によって優勝者を決定するところまで、徹底的に科学コミュニケーションのリアルを追求した授業である。

もう一つの発表は「未来を担うエンジニアに国際コミュニケーション英語を教えるアクション主導型の授業でAIツ

ルを使う」(Portman)である。ここでは理工系のビジネス専攻の学生向けのAIツールを駆使した問題解決型のグループプロジェクト型の授業が紹介されていた。この授業は日中に大学に通学するのが困難な履修学生のために、完全にオンラインで開講されている。学生はChatGPTのプロンプトの書き方を学びながら、ビジネスの現場で起こりそうなシナリオベースの課題を自ら作成し、ChatGPTを用いて参考文献を探し、グループで手分けして文献を読み、情報共有しながら課題解決のためにディスカッションを重ねていく。最終試験は個別の口頭試験のため、学生は英語で話す練習をしなければいけない。そのためのツールとして、sherpaやcharacteraiといった会話練習用のAIサービスを学生に活用することが紹介されていた。^{vii)}

ここで紹介した事例は、GELSが時間とリソースが限られた世界中の外国語教員と共有し、さらなる「コラボレーション」につなげようとするものである。ワークショップと学会への参加を機に、学内外の「コラボレーション」の輪を広げ、さらなる英語教育の活路を見だしていきたいという思いをあらたにした。報告者は2023年度後期から、「AI社会における外国語教育」研究会を運営している。ILA主催のもと、2023年11月末時点ですでに二度開催されており、貴重な情報共有と活発な議論の場を提供している。GELSとのさらなるコラボレーションも念頭に置きながら、今後さらに研究会の活動を軸に新たな教育の実践を生み出す場へと展開していきたい。

- i) 井村順一「学修における生成系人工知能の使用に関する本学の考え方について」、東京工業大学、<https://www.titech.ac.jp/student/students/news/2023/066590> (2023年11月30日最終閲覧)



- ii) GELSについては<https://www.clic.eng.cam.ac.uk/news/GELS>、LSPHEについては<https://lsphe.wordpress.com/>を参照。(2023年11月30日最終閲覧)



- iii) 杉山明枝「大学の外国語教育におけるESPの可能性」『大妻女子大学英語教育研究所紀要』第4号(2021)177-8頁(177-187頁)。<https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7035> (2023年11月30日最終閲覧)



iv) KTHの環境人文学ラボについては、別の機会に紹介したい。セミナーのあと、ラボの創設者で1980年代からこの研究領域を牽引してきたSverker Sörlin氏と主任のAdam Wickberg氏にお話をうかがうことができた。ラボについては以下のサイトを参照。<https://www.kth.se/ehl/environmental-humanities-laboratory-1.1225452>



v) "LSPHE 2023", LSPHE Webiste, <https://lsphe.wordpress.com/events/2023-2/> (2023年11月30日最終閲覧)



vi) ガイドは以下で閲覧できる。<https://www.kth.se/en/larande/sprak/utbildning/sprak/eng/writing-guide/introduction-to-the-guide-1.1149092> (2023年11月30日最終閲覧)



vii) 学会で紹介されていたAIツールのリストを以下に記す。
【英会話自習用】①Sherpa Lab (<https://sherpalabs.co/>)、②inworld.ai (<https://inworld.ai/>)、③Chracter ai (<https://beta.character.ai/>)



【リーディング練習用】chatpdf (<https://www.chatpdf.com/>)



【プラグイン】www.languagereactor.com (youtubeやnetflixへのプラグイン。素材に字幕をつけたり、語彙の意味をその場でチェック機能をつけられる。)



【ライティング補助ツール】DeepL Write (<https://www.deepl.com/write>)



オールド上海への扉 ～上海図書館訪問記～

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

准教授 楊 冠穹

上海は四季にわたって湿度が高く、夏の日中は35度を上回るとベタつく感が倍増する。このような上海の8月は秋に入りつつも、決して爽快な季節とは言えない。コロナ禍でなかなか帰国する機会がなく、4年ぶりに故郷である上海の地を踏んだ自分は、迎えに来てくれる運転手さんが発した上海語「ノンハウ」（上海語でこんにちはの意味）の一言になんと爽やかな気持ちになった。

「外国語への招待」の授業でも毎回学生に紹介するが、上海語は発音が日本語と非常に似ている部分があって、その類似さを代表する有名なフレーズ「アツマワアタシワ」が挙げられる。発音はまさにそのまま、かなり日本語っぽく聞こえる一方、実は上海語では「靴がまだ壊れていないのに、靴紐が先に壊れた」というしっかりした意味として成立する。

しかし、残念ながら上海語には文字が存在していない。もちろん中国語の漢字を上海語で発音することはできる、当て字を使って表示することも不可能ではない。近年となって『上海話大詞典』のような辞書まで出版され、それまで書けなかった上海語の書面表記がようやく標準化できている。だがふと思った。文字がなければ学習するのとも難しいはずだと。昔に上海にやってきた日本人は、上海語をどのように覚えたのか、彼らにとって上海語の発音は日本語に近いものなのか、それで親近感が湧いたり勉強熱心になったりするだろうか。そのような疑問をもって、東工大に着任して初めての出張を機に、上海図書館に訪ねてみた。

かつて、「東方のパリ」または「魔都」と呼ばれるオールド上海は、南京条約により開港した後におよそ100年間の租界時期を過ごした。租界とは、いわゆる外国人が居住するエリアのことである。法的に決められたイギリス租界とフランス租界のほか、土地の購入により実質に形成したアメリカ租界租界として区分されていなかったが民衆の間では公認された通称「日本租界」が存在した。いろいろな国から集まってくる人々は、上海の土地で生活していた。彼らにとって情報交換の重要な手段の一つは、新聞や雑誌などの文字メディアだった。こういった資料から、オールド上海における人々の生活を窺える。

中国人による最初の近代出版社、商務印書館はこのような上海で設立された。場所は当時、通称四馬路（ス

マロ）の福州路にあり、現在でもわらゆるな出版社や本屋さんが集中しているエリアである。およそ4万平方メートルを誇る超大型の書店、上海書城もここに堂々と建てられている。書店では最新の図書が販売されているのに対して、図書館には過去につながる書籍が多い。上海図書館は、多言語のメディア資料を含む、租界初期の1850年代から戦後にわたった当時の西洋、中国の社会情勢を知る上で貴重な資料を最も多く所蔵している。資料の合計点数は3000万点以上の超えており、その上すべての資料がデータ化され、館内でアクセスすれば誰でも簡単に検索・閲覧できる。実は、上述した上海語に関する日本語図書は、日本でも一部の大学で閲覧することは可能だが、一度に大量の資料を同時検索、さらに直接に電子版で閲覧できるのは、おそらく上海図書館でしかできない。

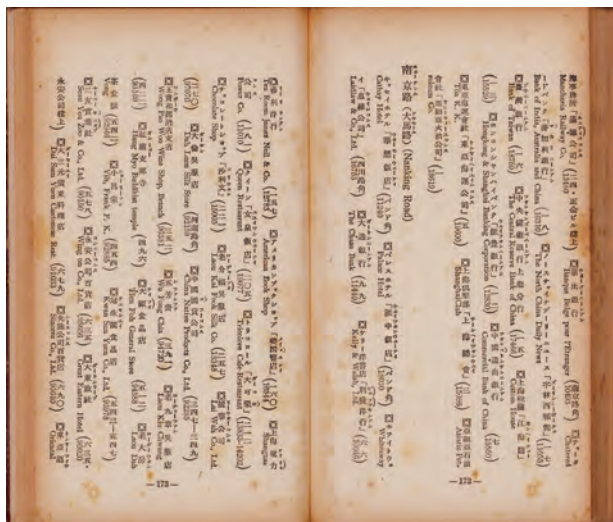


図書閲覧のために無料のメンバーズカードを作成する必要がある。中国人の場合は手元にIDカードがあれば、自動式の発行機で数秒ほどで簡単に作れる。外国人ならパスポートを職員に提示して、窓口で発行してもらうことになる。私が行った日は混んでいなかったが、観光客に見えた外国人がいたことに少し驚いた。観光のために博物館を訪ねる人は多いが、図書館まで行ってメンバーズカードを作る光景はなかなか見られない。

その日は文献調査の後、データベース担当者の王之穎さんと打ち合わせの約束があったため、待ち合わせをしていた。王さんは上海図書館データベースの一つである「中国近代中英文報紙全文数拠庫」を利用した研究レポートを執筆しており、新聞に掲載されている映画制作会社の広告を調査した。文字資料だけではなく、画像を含んだ資料もデータベースを使えば簡単にできる事例として、研究に扱う資料の開拓にはとても啓発的だった。ところで、待ち合わせの場所は近くの衡山路にあるおしゃれカフェの一角だったが、ガラスの窓を越して見た道沿いにプラタナスがき

れいに並んでいる風景は、すぐにここが旧フランス租界だと想起させてくれた。それらのプラタナスは、上海で「フランス青桐」とも呼ばれているが、フランスとも青桐とも実は無関係である。ただフランス租界に植えられただけで、今でも名にフランスが付く、これもまた言葉の力を感じたささやかな出来事だった。

目当ての日本語資料について王さんに尋ねてみたら、書籍であるためデータはないが、実物なら分館の徐家匯蔵書楼にあるとのこと。徐家匯は上海開港後、最初に到着した宣教師たちのための住む場所として選ばれた。そのため、蔵書楼の位置は徐家匯天主教堂のすぐ隣に所在している。日本語資料につきましては三日前に予約する必要があるので、速やかに予約して出張の最終日にギリギリ間に合って訪れることができた。ただし、貸出はいっさい不可で、その場で閲覧のみとなる。それでもポロポロになった約100年前の本を手にした実感は、データベースの便利さとどちらも捨て難い。



今回閲覧した資料の中には日本の出版社によるものもあれば、上海現地の出版社によって出版されたものもある。内容を比べてみると、前述した当て字の表記が散見され、著者によってそれぞれ異なるが、発音に関してはローマ字あるいは日本語で表記されている。また、上海の街の情報を記載している著書がほとんどだった。例えば、文求堂が出版した『實用速成上海語』の付録に上海市内名所が一通り掲載されている。これらの名所の名前は、それぞれ中国語名称、英語名称、日本語訳、さらに上海語の発音を表す日本語が書かれている。日本語で表記されている単語を発音してみたら、実際の上海語の発音にそこそ近い。上海は今も比較的日本人に親近感を持つ街な理由は、言葉の親近感にあるかもしれない。ちなみに同書は日中戦争の間に何度も再版され、1944年には二十四版も印刷されている。実に人気な実用書に違いない。

さて、上海図書館データベースは今年久しぶりにトライアルキャンペーンを開催する。大学などの研究機関で申し込

めば、2ヶ月の間に各篇100資料の原文ダウンロードおよび閲覧が無料でできる。さらに、今回はコロナ禍の影響により中断した定番イベントの再開とのことで、期間および制限については申請により延長追加可という、お得なキャンペーンになる。日本に戻り、早速申請手続きを取ろうとして東工大図書館とILA図書室に問い合わせたところ、いずれも対応が難しかった。そこで、外国語事務室の小川瑛子さん並びに英語セクションの石原由貴先生のご尽力で、外国語学修資料室から無事に申請でき、9月半ばから学内アクセスでデータベースを利用できるようになった。

社会・人間科学コースにこの情報を拡散した後、大学院博士後期課程の玉置文弥さんが利用を申し込んだ。東工大の大学院では文系は少数派だが、中には中国に関する研究をしている学生は少なくない。例えば、玉置さんの場合はメディア資料などを扱って、戦前期の日本と中国の宗教連携が超国家主義アジア主義とどう結びついたのかを研究している。私自身は玉置さんの博士中間発表にコメント教員を務めており、博士論文の審査にも関わっている。こうして、自分の手掛けた仕事が学生のためにあるかもしれないと思うと、何よりも喜ばしい。

今回、久々の帰省でさまざまな人、もの、風景を目にした。馴染みのある街とはいえ、時が変わる見方も変わる。この旅を通じて得た新たな視点や発見、そして感じたことを、今後の授業で学生に共有したい。



「大学から始めよう ― 東工大の第二外国語」

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

准教授 安徳 万貴子

2023年8月10日、本学のオープンキャンパスが催され、今年は敷地と建物も開放され、多くの方々が足を運んでくださいました。大岡山キャンパスの正門に入り、本館を仰ぎながら緑の草地をくぐると、食堂に面した建物の窓に「第二外国語」の文字と万国旗―そんな導線の願いもかない、大学で学ぶ第二外国語を紹介する会場にも、数百人の来場者がありました。

多くの人が最初に学ぶ外国語は英語。大学に入ればさらにさまざまな外国語と出会い、学習の域をこえ、思わぬところで言葉との深いつきあいが始まります。楽しみに心の準備を……!と呼びかけるつもりで開いた、初めての展示でした。けれども、この企画のタイトルを、ご来場のみなさんがあざやかに超えてくれることになります。

本学で英語のほかに学べるのは、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国語、イタリア語、古典ギリシア語、ラテン語です。会場には、それぞれの言語の紹介文とともに、言語ごとに種々の本を集めました。教科書、辞書、語学参考書のほか、小説、哲学書、各言語圏で出版された本、美術・食文化・歴史を知る図説、本学教員による翻訳、研究書などなど。

来場者は各テーブルをまわりながら、あるいは座って一息つきながら、紹介文に丹念に目をおし、展示物を手に取っておられました。なかでも、初級教科書を開いて熱心に読みふける背中、背中。まるでもう教室にいるかのように質問していく若者たち。この企画の意図を軽々とこえる人たちがいました。ものが、本が、人がそこにあれば、ことは始まってしまうのです。

*

母語でない言葉に思わず転がりこむ体験といえば、石井桃子さんの訳業が想いおこされます。『クマのプーさん』の原書をはじめて開き、子どもたちにせがまれて日本語にし始めたとたん、その世界の「体温」を感じ、皆が「波長」をつかんだといいます。その夜、一冊の英語の本から、あのすてきな日本語が転がりてきました。物語の終わり、少年クリストファー・ロビンが「いってしまう」つまりこの物語の森を出て、学校へ行き大人になるのだと、動物たちがなんとなく察しあいさつに来る場面。少年は「やア、みんなきたね」と言います、「プー、こんちは」。石井桃子さんはそう訳します。もとの文は―‘Hallo, everybody,’ said Christopher Robin - ‘Hallo, Pooh.’―です。「みんなきたね」には「お別れだね」と、一人一人に触れるような眼差しがありませんか（everybodyという呼び方がその感触を

生むのでしょうか)。言葉は表すものであり、同時に隠すものでもあり。一語一語に、口にされなかった、書かれなかった気持ちが滲みます。それを感じるができるのは私たちです。

18世紀末、ベルリン王立学術アカデミーから、人の言葉の起源を明らかにせよというお題が出されます。その問いには、神から与えられたか否かという議論の方向が含まれていたでしょう。けれど、ある人（J.G. ヘルダー）はこう応答します、「言語は発明された! まさしく人間が人間であったのと同じように自然に、そして人間にとって必然的に発明された」。人が人である以上、言葉を作らずにいられない。人は相手と「知り合いになりたい」と欲する生き物だから、というのです。生きるために喰らいあうだけでなく、たとえば目の前を通りすぎた「白く、おとなしく、もこもこした」「メエと鳴くやつ」に、また会えたとき「ああ、あのときの君だね」と思い出す印として名前が必要だから、言葉を発明したのだと。

*

ご来場くださったみなさんと、迎えた私たちは、まだ名も知らないものですが、どこかの教室でまたお会いしましょう。お越し下さりありがとうございました。

目印になる窓の文字と旗、会場設営、ポスターや書籍をご準備くださった外国語事務室のみなさま、TAさん、リベラルアーツ事務の方々、同僚のみなさま、この夏の催しを支えて下さった方々に感謝申し上げます。



オープンキャンパス会場

2023年度「東工大の研究者展」への登壇

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

准教授 小泉 勇人

はじめに：東工大展とは

2023年度、二日間にわたる東工大祭の最終日10月29日(日)蔵前会館くらまえホールにて「東工大の研究者展」(Curiosity Driven Research Expo、以下CDR展)が開催され、先生方と学生からの御推薦をいただき参加する好機に恵まれた。「純粋に知的好奇心に基づいた研究を続けている愛すべき知の探究者達が研究室を飛び出て、自らの研究の『おもしろさ』を皆さんに直接お伝えします。数学、物理から材料科学、生命科学まで、全11テーマがあなたをお待ちしています。」(工大祭ウェブサイトより)というコンセプト/宣伝文句の下、ポスター発表と3分間のショートプレゼンテーションの準備をして臨んだ。

CDR展の準備：学生サポート要員と
リサーチアドミニストレーターの方々

発表する教員にはサポート要員として東工大生(現役/卒業生)が付く。当日までに発表内容の相談や諸々の段取りをサポートする役割である。筆者も担当の石川新さん(環境・社会理工学院 融合理工学系 B4)と事前に一度ミーティングをもち、じっくりと話を聞いてもらうことで考えがまとまり方向性が定まったような気がした。また当日は東工大リサーチ・アドミニストレーター(URA)の方々による準備のお手伝いもあり大変にお世話になった。サポート学生の石川さん、URAの方々には改めて感謝申し上げます。

ポスター発表当日の様子

人生で初めてのポスター発表は非常に新鮮であった。来校する高校生にもわかるように、かつ最新の知見も加えるように調整する営みが難しくもあり、また楽しくもあった。幸いなことに、実際に出来上がったポスターは色鮮やかで、思い通りのイメージであった。発表自体は、ある程度の人数(もしくは一人でも)が興味を持ってポスター前に立ち止まったタイミングで解説をするのがスタンダードらしい。タイミングが任意というのも面白く、呑気なことに、今更ながらこのような発表方法もあるのかと感心した。また筆者は映画について発表する関係上、ポスターの横にプロジェクターで投影した実際の映像を流し続けることにした。扱う作品がジョエル・コーエン監督による最新の白黒映画という関係上、独特な映像の「質感」を目にして

もらうと話が早いと判断したからである。ポスター発表に際し特に印象深かったのは、シェイクスピアについて研究者かと思えるほどにクリティカルな質問を熱心してくれた高校生がいたことである。質問の内容もさることながら大人びている雰囲気のため大学生かと思ったが、年齢を聞いて驚いた一幕であった。

発表内容：21世紀のコーエン版『マクベス』

ポスター発表の題は「『マクベス』映画化の最前線～コーエン監督版(2021)の映像表現」とした。下記、ショートプレゼンテーションの準備の一環として書いておいた原稿を載せたい。あくまでもリハーサル用の原稿で実際のプレゼンテーションではアドリブに任せしたが、話の雰囲気を掴んでもらうにはちょうど良いと思う。

こんにちは。リベラルアーツ研究教育院の小泉です。16世紀のイギリスの劇作家ウィリアム・シェイクスピアの芝居がどのように映画化されているのに関心があり、研究しています。今日は、シェイクスピアの代表的な悲劇『マクベス』の映画化についてお話しします。短い時間ですので、せめて、シェイクスピアの面白い英語の台詞だけでも楽しんでもらえたら幸いです。

『マクベス』という悲劇は、「人殺しのリアルな心理」を生々しく表現しているという意味で興味深い芝居だと、私は考えています。芝居は、中世スコットランドの武将マクベスが戦場から帰還中、出くわした魔女に未来を予言されることで始まります。魔女から「あなたは王になる」と言われたことが、マクベスの野心に火をつけます。“Fair is foul, and foul is fair”(綺麗は汚い、汚いは綺麗)という魔女の言葉が伝えるように、道徳的な良い悪いの判断には意味がないんじゃないかとマクベスは悩んでいます。妻にも焼き付けられて“What’s done is done”(やってしまうと、それはやってしまうことになる；殺せる時に殺してしまおう)と考えてしまい、高潔な主君を寝室で刺殺します。ついに王となったマクベスですが、罪の意識に押し潰されていきます。“full of scorpions is my mind”(俺の脳をサンリがウジャウジャ這いずり回る!)というおぞましい台詞が、マクベスの殺人者としての生き地獄を見事に表現しています。

さて、そういった悲劇『マクベス』を、ジョエル・コーエンというベテラン監督が2021年にどう映画化したか、というのが私の関心です。ここでは、『マクベス』を代表す

る台詞“Fair is foul, and foul is fair”の映像化に着目します。まず魔女が不安を掻き立てる身体動作を見せてくれます。“Fair is foul, and foul is fair”という、物事の境界を転倒させるような不穏な言葉を体現するかのよう、手足の向きがチグハグなままそれを動かして見せてくれます。また、一年前の映画にもかかわらず、あえて白黒映画として撮影されています。マクベスの城がコンクリート塀による直線で構成され、観客が直感的に閉所恐怖症的な感覚を覚えるようにデザインされています。加えて、城の中にも関わらず奥の方で森が続いているという、幻想的な絵作りがなされています。こういった映像デザインによって、マクベスが殺人に手を染めてしまう決定的な台詞“Fair is foul, foul is fair”を表現しているのが、コーエン監督の技であると言えそうです。以上、16世紀のお芝居が現代の映画としてどのように甦るのか、その一端をお伝えできていましたら幸いです。

“Fair is foul, and foul is fair”という価値転換の呪文を聴衆の脳みその裏側にこびりつかせ蠍のようにウジャウジャと蠢かせることができたとしたら、発表者としてこれ以上の喜びはない。

終わりに

「東京工業大学」としては歴史上最後の工大祭であるが、このように貴重なタイミングで登壇者として参加させていただいたことはまたとない機会であった。また、自分以外はどなたも理系の先生方であったが、新進気鋭の研究を伺えたことは大変に刺激的であった。この場を借りて、参加をお声がけくださった理事・副学長（研究担当）の渡辺先生、また背中を押してくださったILA院長の山崎太郎先生に御礼申し上げます。大変に発見の多い1日を過ごさせていただき、参加できたことを嬉しく思います。

2023年度の東工大ライティングセンター

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

ライティングセンター・ディレクター 准教授 小泉 勇人

はじめに

東工大ライティングセンターが2022年度3Qから対面型として開室して1年が過ぎた。2023年は1Qから4QにかけてTaki Plaza B1の相談ブースエリアにてチュータリングを提供している。当時は新人であったチューターもベテランになり、新人も加わって技能の研鑽に励んでいる。引き続き運営にあたっては教育の質向上サイクル推進助成(EdCycle Grant)の予算を運用し、チューターが文章指南を学ぶ研修と、それを実践で活かす勤務の運営が可能となっている。本稿では、ライティングセンターが創立期から発展期に差し掛かろうとしているこの一年間に訪れた変化を報告していきたい。



リニューアルに際しオリジナルのチラシをトップに飾るセンターウェブサイト

新体制：昼休み開室とオンラインセッションの追加

2023年4Qからは新しい試みとして、「昼休み開室」と「オンライン・セッション」を導入した。昼休み開室は、(空腹には左右されるが)授業の有無に左右されない時間帯として書き手に利用してもらえればと考えている。実際に書き手が昼休みに多く利用してくれるかはまだ未知数の段階であるが、実施する価値はある。

オンライン・セッションは、すずかけ台キャンパスなどで遠隔でセッションを受けたい学生、また大岡山キャンパスなど近い場所にいたとしても現場に来られない学生に要望があるという話をチューターから受け、対面と並行してぜひ実行したいと考えた。この実行には、コロナ禍において作成したライティングセンターのオンラインセッション・マニュアルが大いに役に立った。現状に合うようにカスタマイズされたマニュアルは現在も間接的にオンラインセッションの運営に役立っている。

創造的な広報

2023年度はライティングセンター独自の広報を幅広く展開した年であったと言える。1年前の「外国語便り」にて「その日に用意したセッションが全て埋まるという望ましい状況にはまだ遠いものの、一日分の予約を二人でも、三人でも増やしていくためにも、宣伝活動を含む活発な運営が必要であろう」と記した。「教養卒論」など各授業に加え、2023年は電光掲示板とチラシが広報のキーとなった。



まず大岡山キャンパスに点在する各種電光掲示板での定期的な掲示は少しでもセンターが学生の目に留まるよう機能している。学生支援センター(附属図書館、第二食堂)、Taki Plaza 縦型デジタルサイネージ、工学3学院(ゼンインレブン)など、キャンパスの様々なエリアで広報は続いている。

さらに、オリジナルのチラシを作成できたことは大変に大きな飛躍であった。最大の目玉はチューター本人によるデザインという点にある。的確な色味によって組みあわさったデザインの向こうにうっすらと写っているのは、実際にセンターの相談ブースの椅子に座っているチューター達である。創ったのもチューターであれば映っているのもチューターという自主性の元、創造性が如何なく発揮されたチラシのデザインは、書き手との多様かつ創造的なセッションを常に目指すセンターを象徴的に表現している。広報については外国語事務からの提案に追うところが多く、電光掲示板の継続した表示依頼も含め尽力していただいている。

◆オンライン：予約セッション開始までのプロセス

- (1)以下の予約用カレンダーで、チューターのタイプ(L, E, J)を選択
- (2)カレンダーに表示されているセッション可能枠を選択
- (3)所定の利用者情報を入力後、自分が指定したアドレスに予約完了メールが届くのを確認
- (4)(土日祝日を含まない)3日前までにSlack #t2-writingcenter-online-applicationにてZOOMリンク受取の申請
- (5)セッション日時数時間前までにチューターよりZOOMリンク送付
- (6)セッション時間までにZOOMへ入室
- (7)セッション時間が来たらZOOM越しで対面し、問診表を記入
- (8)セッション開始

センターウェブサイトに表示されているオンラインセッションの案内

守・破・離の流れで成長していくチューター達

ベテランチューターは8名となり（内1名は2023年に卒業）、文章指導については型を守りながらも自分なりの指南を展開できるほどに成長している。チューターとしてセッション中に踏むべき手続きは多い。悩みを聞く、目標を立てる、音読させる、音読の感想を聞く、改めて目標を確認する、メモをとりながら傾聴し、アカデミックライティングのルールを踏まえた上で書き手の考えを促すような質問を提供し、書き手にもメモを促し…とセッションには数多くの動作があり、チューターはこれらをごく自然な会話のうちにこなしていく。もちろんこれらの動作には一つ一つの意義と効果があり、まずは型通りにセッションを進めていくことが肝要である。

しかしながら、チュータリングに慣れてきたベテランはこれらの手続きを徐々に自分なりに、書き手にとって最も有効なタイミングで効果を発揮するように即興でカスタマイズできるようになる。筆者はチューターとのミーティングにて、音読を好まない書き手を担当した話を耳にした。確かに音読は、何らかの理由によってしたくない書き手もいるはずである。そうしたときに、手順だからといって音読を強いるようでは柔軟なセッションにはならないであろう。書き手がやりたがらない活動は無理に実践する必要はない。音読が封じられたら、さっと黙読に切り替える柔軟さもチューターには求められる。

その気になれば順番を変える、部分的に省略する、あるいは繰り返す、自分なりの言い方を添えるなど含め、あらゆる動作がカスタマイズ可能である。現に話をしてくれたベテランチューターは書き手のコンディションから音読にこだわらないセッションを展開することでより本質的な文章改善を達成していた。このように、型としての動作を自分なりにカスタマイズしていく創造性は、武道で言うところの「守・破・離」を考えれば腑に落ちる。まずは師から学ぶ型を「守」る、そして経験を積み重ねて自分なりにカスタマイズしあえて型を「破」っていく、そして最終的には師の技から「離」れて自らの道を作り上げていくのである。筆者は常々、文章

チュータリングは武道に近いものだと考えているが、それは例えば合気道や截拳道（ジークンドー）を思わせるからであろう。文章チュータリングがある意味において武道と近いのであれば、「守・破・離」に沿ってチューターが成長していくこともまた自然であるように思う。

ライティングセンターは2023年4Qからさらに二人の新メンバーを迎えた。新たなる仲間が型を実践する機会に多く恵まれ、やがては今のベテラン達のように成長していくことを願うばかりである。

令和3年度 東工大教育賞の受賞

2023年2月27日、更なる躍進に向けて背中を押されたような気がする機会に恵まれた。この日は大岡山キャンパスにて「令和3年度 東工大教育賞」授与式が行われ、東工大ライティングセンターは「学生同士の学び合いに基づき学術的文章の執筆を支援する機関の創設と運営」とする題目において優秀賞を受賞した。教育に関して優れた業績を挙げたとして選ばれた10件の内の一つとして、筆者は代表して賞状を受け取る幸運に恵まれた。ILA外国語セクションライティングセンターによる教育支援が、チューター達の絶え間ない文章指導力研鑽が、縁の下の力持ちである外国語事務室の働きが、そのほか数多の人達からの支援が受賞につながったのである。

終わりに:発展期の入り口に立ったライティングセンター

東工大ライティングセンターは2022年度3Qにおいて対面型に切り替わり、2023年度も同様に稼働してきた。また2023年4Qからは新たな需要に応える形で、昼休み開室とオンラインセッションも提供している。研修の内容も軸となる部分は変わることなく、チューターはこれまでと同様の質を保ったセッションを書き手に提供できるはずである。まだまだ利用者の数は満足のいく段階に達しておらず、せっかくの優秀なチューターが存分に能力を発揮する機会が十分に得られていない現状はどうかしなければならぬが、このような課題も引き受けつつ、センターの仕事を着々と進めていきたい。惜しみなく助言を下されるILA外国語セクションの石原由貴先生、「外国語便り」執筆のお声がけをくださる田村斉敏先生、Taki Plaza学生相談ブースのエリアを設けてくださっている未来人材育成センターの伊東幸子先生、各担当授業にてセンターを宣伝いただいているILAの先生方、運営に労力を注ぎ、また各チューターの勤務に関わる手続きを担当くださっている外国語セクション事務の河瀬さん、青山さん、中込さん、そして日々のセッションにて東工大生の文章力向上のために尽力している一人一人のチューター達に感謝をお伝えします。様々な助力の下、東工大ライティングセンターは創立期から発展期に差し掛かりつつあります。



東工大ライティングセンターオリジナルのチラシ：デザインを請け負ってくださったベテラン長谷嘉琉チューターに、快く写真に写っていただいたチューター達に心から御礼申し上げます。

言葉を可視化する

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

准教授 広本 優佳

英語科新任教員の広本優佳と申します。専門は18-19世紀イギリス小説で、とりわけジェイン・オースティンの作品に関心を抱いています。現在取り組んでいる研究「ジェイン・オースティンの歴史的想像力」では、18世紀半ばから後半にかけて流行した啓蒙主義の歴史の文体が、オースティンの執筆物のスタイルに与えた影響を探っています。

私は昔から歴史が好きでした。大学受験生であったときには、史学科もいくつか受けています。最終的に英文学科を進路に選びましたが、パラレルワールドの私は、もしかしたら史学を志しているかもしれません。ただし、歴史が好きと言っても、たとえばジャンヌ・ダルクのファンだとか、戦国時代のオタクだとかいうわけではありません。心血を注いで入れ込む具体的な歴史的人物や時代があって、結果として歴史を愛するというより、過去や歴史という概念や雰囲気そのものに何となく心魅かれるのです。「お寿司が好き」なのではなく「食べ物が好き」と言っているようなものです。

カリスマ的魅力を放つ著名な偉人を動員せずとも、歴史が読者を魅了しうるのはなぜなのか。こうした問いが、歴史を伝える言葉自体を研究対象に据えたきっかけです。例を挙げると、名誉革命の推移を明らかにするのではなく、名誉革命の推移を描写する言語表現に注目することです。

もちろん、どこまでが歴史的人物や出来事そのもので、どこまでがそれを伝える言葉なのか、確信をもって線引きするのは困難です。言葉（あるいは視覚表現）を介さずに、すでに死没した人物を知覚するのは不可能だからです。それでも、私たちの認識の網を容易にすり抜けてしまう、半透明な媒体である言葉を可視化することには、大きな意味があると思っています。現代の読者は、たとえば歴史の教科書を読むとき、その文が美しいかどうかをわざわざ考えたりしないでしょう。しかし、オースティンの生まれた18世紀においては違いました。歴史はしばしば文学の一種として分類され、格調高い言葉で綴られた歴史には、最大限の賛辞が贈られました。文学としての歴史という今となってはほぼ失われた視点を回復することで、歴史というジャンルの売り文句の一つ「客観性」が神話に過ぎないのだと、私たちは自分を戒めることができるようになります。月並みな言葉で言えば、歴史を批判的に読解できるようになります。

私の研究では、こうした歴史の言葉や文体を、小説の

それと比較しています。イギリス文学史において、小説は（諸説ありますが）17世紀に誕生した比較的新しいジャンルです。人類は太古の昔から小説を嗜んでいたわけではなく、当時の人々にとって、それは目の覚めるような斬新な形態の娯楽であったことでしょう。小説が支配的文学ジャンルとしての地位を確立した現在、それがいかに異様な人工的構築物かということに、もう一度驚嘆しなおすことが、私の目標の一つです。文の様々な構成要素（文の長短、比喩、倒置、話法、章立てなど）や、ジャンルの持つ特徴・制約を自在に駆使するオースティンの職人技は、そういう意味でうってつけの研究対象だと考えています。オースティンと同時代に生きた文人トマス・ラヴ・ピーコックは、かつて同じく同世代の歴史小説家ウォルター・スコットの小説の文章を「引用したいとは思えない」とけなしました。スコットの文章がどうかはさておき、言葉の質感に敏感なオースティンはまさに「引用したくなる」作家です。

学部向けの授業でも、英語の意味だけでなく、それを入れる器ともいべき言葉自体を（流行りの言葉を使うと）「見える化」することを目指しています。独創的な表現に邂逅したときの無上の喜びを、いろんな人と共有するのが楽しみです。

紅葉の季節に書いて

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

准教授 楊 冠穹

中国語新任教員の楊冠穹と申します。2023年4月に着任して早くも半年が過ぎましたが、構内でまだ行ったことのないスポットがたくさんあって、毎日いろいろと新鮮な気持ちです。着任前は大阪にある関西外国語大学で主に中国語教育を行っていました。現在は第二外国語科目としての中国語授業のほか、文系教養科目の外国語への招待や世界文学を担当しています。今回はこの場を借りて、私が考える授業のあり方と大学という場所を通じて感じたことを語ってみたいと思います。

実は今年は東工大ではコロナ禍以来初めての完全対面授業だと聞いて、学生とのふれあいがとても楽しくなって、新学期早々授業をしている実感が湧きました。同時に、オンライン授業の時に積み重なった経験もまた、新たに役立つこととなります。例えば遠隔授業に使われていたZoomですが、今現在もずっと画面共有と録画機能を利用して授業を行っています。学生は動画を復習に使ったり、万が一欠席した場合でも、リアルタイムのようにスライド資料とそれに基づいて書いた板書を見ることが可能です。

もちろん、なんでも資料として共有してしまうと、学生は授業に集中しなくなるという見解もあるでしょうが、それを否定するつもりはありません。むしろ自分にとっては、そのようなリスクがモチベーションになります。動画では体験できない現場のおもしろさに常に心掛けて、学生が聴きたくないような授業づくりを目指しています。中国語の授業は少人数で演習であるため、単調な反復練習ではなくささやかなゲームを通じて学生の興味を惹きつけた方が効果的です。比較的に伝統な習った単語を使ったしりとりゲームや、理系の学生が得意と思われる数字のゲーム「パスセブン」（7または7の倍数を言わずにパスするゲーム、もちろん中国語で）など、動画だけでは参加できない且つ楽しい現場を創出することによって、学生の参加度を高めます。

私の専門は中国現代文学、特に「八〇後（パーリン・ホウ）」作家を中心とした文学・文化研究を行っています。「八〇後」というのは、中国語で1980年代生まれの人たちを指す言葉です。改革開放政策による市場経済社会の成長とともに歩んできた世代になりますが、実は私自身もその中の一人です。この研究テーマは自らの成長過程に直面する、すなわち内省という意味を含んでいます。

第3・4クォーターに開講される世界文学では、中国現代文学を中心に講義していますが、定番で日本人の学生にとって馴染みのある魯迅、あるいは近年ノーベル

文学賞受賞で知られるようになった莫言だけではなく、自分の研究対象である「八〇後」作家の韓寒をも紹介しています。そこで背景となる中国の社会の劇的な変化と、自分自身の実体験を余談に話したら、意外と細かいところまで目を付けてくれる学生は少なくありません。さらに、仙侠、武侠、科幻など日本における受容が低いファンタジー類のジャンル、同時に関連する翻訳と研究が少ないため普段あまり目に入らないジャンルでもありますが、それらの作品を扱って、あえて想像と異なった最新の文学を紹介することで、学生の関心を喚起しようとしています。

このたび、四年ぶりに東京に戻って、そして東工大で教えることになり、新しい環境に飛び込んで新しい人々と出会う、さらに新しい物語を描く、そういった無限な可能性にとってもワクワクしています。他国のことや異文化を完全に理解することは難しいです。それでも私が日本を好きになったように、今この瞬間日本語で文章を書いているように、学生に少しずつ中国のことをわかってもらえると嬉しいです。もっとも、そのような相互理解の姿勢が私の微力で一方的な考えや感情によらず、より客観的な理性的思考につながると幸いです。これからもどうぞよろしくお願いいたします。



東京工業大学リベラルアーツ研究教育院 外国語セクション

外国語だより Vol. 8

VOICES FROM THE FOREIGN LANGUAGES SECTION, INSTITUTE FOR LIBERAL ARTS, Vol. 8

発行日 令和6年3月1日

発行所 〒152-8552 東京都目黒区大岡山2-12-1
東京工業大学リベラルアーツ研究教育院 外国語セクション
TEL 03-5734-2287 FAX 03-5734-2938

発行者 山崎 太郎

編集者 田村 斉敏・楊 冠穹

印刷所 株式会社鮮明堂